
夢 =dream=

羅悸龍螢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢 " d r e a m "

【Nコード】

N 8 9 0 7 C

【作者名】

羅悸龍螢

【あらすじ】

美人でもなく、ブスでもない、いかにも普通の杏子と細く切れ長な目で中性的。そして特別な“能力”を持った莠。この高校生2人組は、退屈な夏休みに、“探し物屋”という変わった仕事を創めます。幽霊の猫を探したりと常識を外れたことが起きます。そして2人は常識と現実から離れていくのです。

1 黒猫

何だかよく分らない中に高校最初の夏は始まっていた。

杏子という、このお人好しで情に流されやすいやつは、唯一自分の能力を知っている人間だった。

そんな彼女に振り回されてばかりの自分は莠^{ゆう}「女子」。今分かつている事は俺はフツーじゃない。

ある日の放課後。

「莠、いいこと思いついた。」

「お前の考える事つてろくでもないことだろ」

「ひどいなあ。本当にいいことだつて、

あんたのその能力使つて夏休みの間仕事してみない」

「仕事つて何だよ。」

「あんたの相手の心や記憶を読む力を使って探し物の手伝いをするんだ。」

「はあ?!」

そして今最初の仕事が始まろうとしていた。

知人が所有していたアパートの一室を、事務所として使っている。

「こんなので客なんか来るのか」

「最初は、こんなもんでしょ。大丈夫だつて。誰か来たみたいだよ。」

ドアを開けて入ってきたのは、小3ぐらいの男の子。

「すいません。ここつて失くしたものの何でもみつけてくれんですよ

ね。」

不安げに男の子が聞く。答えたのは杏子だった。

「ええ、そうです。だから“探し物屋”って言うんですよ。」

ここに座っててください。ほら莠、出番だよ。」

客が、ガキだということが気に入らない。

しぶしぶといった感じで近くに行く。

『ほらガキ。さっさと失くしたものについて、話せ。』

「莠、初めてのお客なのにその態度はないでしょ」

『つるせえ。ガキはガキだ。』

そんな無意味で客に対して失礼なやり取りをしていると、

さつきから緊張していたはず男の子がクスツと笑った。

それに気づいて2人はそれまでのやり取りを中断した。

『いくら出せる。』

「何がですか。」

『金に決まってるんだろ。馬鹿』

「いきなりそれはないでしょ。」

『杏子。お前は黙ってる。あといつもの様に記録しとけ。』

「はいはい。分かりましたよ。」

文句を呟きながらもノートを取りに行つた杏子。

「5000円しかないんですけどやっぱ駄目ですか。」

考えこむ莠。そして、

『しかたない。話は聞いてやろう。』

「はい。猫がいなくなつたんです。昨日まではちゃんといたのに。」

今度は、泣きそうな顔になって話し始める。

『どんな猫なんだ。』

「えっと、黒くて尻尾の先と右耳が白いんです。」

『目、閉じてろ。昨日の事をできる限り思い出せ。』

莠の顔が真剣になった。能力を解放しているのだらう。

こついときは話しかけてはいけない。黙って見守ることしかできない。

男の子が考えている事、頭に浮かんだこと全てが流れってくる。猫の姿が見えた。そこで

『ストップ。今考えていたことをそれだけを考えて。』

戸惑いながらも何とかやってみようとしている男の子。5分くらい経っただろうか莠が目を開けた。

『もういいよ今日は帰れ。金持って明日来い。』

そして男の子をドアまで引きずって行き杏子が止める前に締め出した。

「なんであんなことしたの。莠らしくない。」

『無理だ。探すことはできない。』

「なんで。やっぱ莠変だよ。いつもと違う。」

『俺のことなんてどうでもいい。問題はあのガキと猫だ。あの猫は

・。・。』

えっ。その続きを聞いた時私は、固まった。

2 黒猫

『あの猫は、もともと死んでいたんだよ。だから探すことは、難しい。』

会わせてやれないこともないけど。結構つらい。』

えっ。

あの男の子が探していた猫は、幽霊で、実はもう死んでたりするって事なのか。

そんな非現実的なことは信じられない（莠^{ゆう}の事は別として）。小さい頃のこととはあまり覚えてないが、幽霊に出会ったことはなかったと思う。

そんなことは信じたくも関わりたくもないが莠^{ゆう}が言っているのだから事実なのだろう。

『で、どうするんだ。会わせたいんだったら何とかしてやる。』

莠^{ゆう}はこんな話してるのになんで普通な顔してんだろと考えていた。

『できれば、会わせてあげたいけど。本当にできるの。』
『簡単じゃあ無いけど出来ない事はない。』

しかし、さっきので5000円だったから、それに上乗せして・・・ざっと15000出せるならの話だな。』

『金ことになるのか。もし出せないって言ったらどうするの。』

『もちろん、この話はなかったことになる。』

「すみません。明日来いつて言われたから来たんですけど。」
そして接客のために杏子がでる。

「話が長くなって複雑になるになるらしいから、座って下さい。」
わけがわからなくて、一応言われたとおりにしている男の子。
「では、莠説明お願い」

『単刀直入に言う結果は、無理。理由は、
第一、そんな猫は存在していなかった。第二、15000出せる
か分からないから。』

「どう言う事なんですか。」
『ほんと話が分らない奴だなお前。だから、あの猫はもともとこの
世にいなかったんだよ。』

あれは、幽霊だったんだ。だから、お前の頭の中だけに“生きて
”いたんだよ。』
「じゃあ、もう会えないんですか。」

『そんなことは言っていない。会いたいなら会わせてやれないことも
ない。』

だが、それは、別料金ということになるな。ここまでの説明で、
5000円。

だから、会いたいなら追加で15000だ。合計20000って
ところだな。払えるか。』

男の子は、頷いた。そして財布から、20000円を出した。

『今時のガキは、どれだけの金持ってたか。』内心でそう呟いた。

そして莠の表情が一変し、別人のように無表情になる。

『死んだモノを、蘇らせるっていうのは、本来ならあってはならな
い。』

それを行っただから、どうなるかは分らない。もしかしたら、まともな“カタチ”に、

ならないかもしれない。もし失敗しても、やり直しはできない。それでもいいのか。』

長い沈黙。

誰も言葉を発さなかった。

そして、

「失敗するかもしれない。けど、成功するかもしれないですよ。」

「莠は静かに頷いた。

「だったら、お願いします。会わせて下さい。」

「分かった。」

それだけ答えると、莠は目を閉じた。

右の掌を前に出し、左手で肘のあたりを軽く支えている。

ものすごく集中している。昨日とは、比べ物にならないくらい。

気温が急に下がってきた。すると、右の掌の周りに、白っぽい光が集まってきた。

光は、テニスボールぐらいの大きさまで広がった。

そのままだんだん大きくなってゆく。スクールバックと同じくらいの大きさになったとき、

光は、急に広がるのをやめた。今度は、床へと降りてゆく。そして、突然消え、気温も元に戻った。

光があつた場所には、今は黒い毛糸玉が転がっていた。すると、それは動き始め、伸びをした。

“ニャー”

この鳴き声に沈黙は途切れた。

「ルイ」

と言い猫を抱き上げる男の子。ものすごく嬉しそうだ。

莠はソファーに座りこんでいる。

私はというと今、目の前で起きたことが信じられなかった。

「ルイ、一緒に家に帰ろう。」

そういいながら、猫を抱えた男の子はこっちに向き直って、

「ありがとうございます。」

嬉しそうに言い、事務所を出て行った。

「莠、今なにをどうやったの。」

男の子が出ていくと、すぐにそれを聞いた。

「さあね。俺にも分らない。できるかなと思って何となくやってみた。」

この人は、何となくやってみたら、幽霊だった猫を実体化させたそうだ。

こういう時はやはりすごいと言っべきなのだろう。

けれど、直感的に莠ならこれくらいやっても当然だと感じてしまった。

『疲れた。』

そう言っ莠は、ソファーで寝てしまった。

こうして初仕事は終わりを告げた。

~~~~~

男の子は猫を抱えて家へ急ぎ足で歩いていた。

18歳くらいの見知らぬ青年に呼び止められた。

「その猫どうしたんだい」

すると答えは勝手に口から出ていた。

「あっちにある、“探し物屋”というところにいる人に、見つけてもらったんです。」

このとき男の子の瞳から光は消えていた。

「見つけてもらったってどういう事。」

「この子は、幽霊だったらしくて本物の猫にしてもらったんです。」

「どんな人だったの」

「肩につくぐらいの髪で、右目が片方だけ赤い人です。」

「ありがとう」

青年がそう言って男の子の額に触れた時には、もうこの記憶は消されていた。

そして、何事もなかったかのように男の子は歩き始めた。

それを見届け、青年は空を見上げて嬉しそうに呟いた。

「闇羅<sup>あんり</sup>が見つかったよ。」

## 2 黒猫（後書き）

初めてだったので、ものすごくごちゃごちゃしてます。本当にごめんなさい。

申し遅れましたが、私は羅悖龍螢といいます。

本当にまだまだ始まったばかりです。これからまた、キャラが増えていき複雑で単純になっていきますが、これからも読んでもらえればものすごく嬉しいです。

### 3 B・S（前書き）

暗めというか少し血が出てきますがそれが平気な方はどうぞ。（と  
いても、本当にに少しだけです。なのでご安心ください）内容のほう  
は、2 黒猫 の続きになります。

### 3 B・S

「本当、驚いたよ。いきなり倒れちゃうんだから  
どうやら気を失っていたらしい。」

「あとは一人でできるから莠は早く帰って安静にすること。」

杏子は心配性でお節介なやつだ。

けどそれが嬉しくもあるのだ。

半ば追い出されるようにして、事務所を出た。

外はもう暗かった。頬を撫でる風がこの季節に似合わず、涼しいものだった。

なぜ倒れたのかは大体の見当はつく。

“能力”を使った後は、頭痛がする。

倒れたのは今日が初めてでは無かったし特になんとも思っていないかった。

それが甘かったらしい。

頭痛が鋭い痛みへと変わる。

今までにも“能力”を使った後には頭痛はしていたがこんなに酷いのは初めてだ。

さすがにこれは辛い。頭が割れそうだ。

意識が霞んでくる。ここで意識を手放すとどうなるか分からない。

普段は何とか抑えている“能力”だが、ここで意識を失ったら暴走するかもしれない。

だめだ、ここで意識を失っては・・・。

あれ、なんで明るいんだ。

さっきまで夜だったはずなのに。それにココはどこだ。  
部屋一面が紅い。鼻を突くこの鉄のような匂いには覚えがある。  
何なのだろう。あともう少しで思い出せそうなのに思い出せない。  
下を見ると紅い滴が手から零れ落ちていた。

鋭い痛みが頭の中を駆ける。

そうか思い出した。

昨日の頭痛の後“能力”に勝手に動かされて人を殺してしまったんだ。

こうなることは予測できたはずだ。

何故“能力”の暴走を止められなかったのだろう。

人を殺してしまったというのに、なぜか落ち着いている。

それに恐れや恐怖もなかった。

むしろ清々しさ、懐かしさなどという気さえしてきた。

この1年間よりも前の記憶はないが本能のようなもの、魂のようなものだろうか

初めてではないと訴えかけている気がした。

### 3 B・S（後書き）

今まで読んで下さった皆様、今まで本当にありがとうございます。  
私個人の理由によりこの物語を止めようと思います。  
小説は消しませんが更新はしないと思います。

一段落して落ち着いたらまた書き始めるかもしれません。  
けれど、その可能性は限りなくゼロに近いと思います。

今まで読んで下さっていた皆様、続きを待っていて下さった皆様  
本当に申し訳ありません。

羅悖龍螢

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8907c/>

---

夢 =dream=

2010年10月9日11時30分発行